

Monthly Report

Bリーグ 仙台89ERSと朴沢学園が オフィシャルアカデミックパートナーを締結



12月16日（木）、仙台市青葉区川平地区にある「明仙バスケラボ体育館」を会場に、Bリーグ1部の仙台89ERSと朴沢学園によるオフィシャルアカデミックパートナー締結記者会見が行われました。今回締結されたオフィシャルアカデミックパートナーの取り組みとして、スポーツコーチング、スポーツマネジメント、スポーツトレーナー、スポーツ栄養、スポーツ情報分析などの分野において、学生に対しプロの現場での実践的な学習や人材育成、チームや選手の補助の機会を提供していただくことなどが内容として盛り込まれています。

締結にあたり、仙台89ERSの中村彰久球団代表は「現場と選手との深いかかわりの中で研究や勉強ができる。将来的に、学生がプロの場で活躍できるようお手伝いしたい。」とあいさつ。

朴澤泰治理事長・学事顧問も「仙台大学や明成高校の建学の精神である『実学』『創意工夫』に合致した取り組みであり、大学が求められている『教育・研究・社会貢献』の3つが全て網羅された内容である。スポーツ科学には実践の場が非常に重要であり、そのような場を与えていただき大変ありがたい。」とあいさつしました。

また、会見に同席した本学出身の佐藤文哉選手も「スポーツ栄養についてのサポートは早速、練習や普段の生活に生活かすことができている。今後もパフォーマンス向上に繋げていきたい。」とコメントしました。

今回締結した取り組みは全国でも非常に珍しく、既に11月から試験的な活動がスタートしています。来年度からはカリキュラムの一つとして本格的に実施されることになっています。

〈目次〉

仙台89ERSとオフィシャルアカデミックパートナーを締結	1
松島町と連携協力に関する協定を締結	2
スポーツバイキングinあすと長町を開催	3
ベラルーシ、ウクライナを訪問して【報告】	4-5
平成28年度第3回就職ガイダンスを開催	6
「仙台大学第3回学術講演会」を開催	7
学生の活躍	8

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室
直通 0224 - 55 - 1802
Email kouhou@sendai-u.ac.jp

松島町と連携協力に関する協定書を締結



調印後に握手を交わす阿部学長（左）と桜井町長

12月5日（月）に松島町役場を会場に、「仙台大学と松島町の連携協力に関する協定書」の締結式が行われ、桜井公一松島町長や本学の阿部芳吉学長を始め、約10名が協定書の締結を見守りました。

今回締結した協定は、教育上、行政上の諸問題に的確に対応するため、相互に連携協力し、双方の福祉と教育の充実発展に資することを目的としており、高齢者や障害者等の健康づくりの講演・運動教室等の支援に関すること、児童・生徒及び高齢者等の健康増進を目的とした栄養指導等の支援に関すること、児童・生徒の学校におけるスポーツ支援に関することなどが盛り込まれています。

協定式で阿部学長は「本学は、これまでも震災の被災地復興支援に努めてきたところですが、この協定を機会に松島町とも連携を深めていきたい」と述べ、今後の連携協力推進に期待を寄せました。

『第2回還暦同期会』開催 ～38年ぶりの再会に感激！北海道から大阪まで49人が参会～

11月26日（土）に同期生40名に朴澤理事長・学事顧問、阿部学長はじめ来賓、恩師等9名の計49名の参加者で開催しました。

この会は、還暦という人生の節目を機に、卒業生が一同に会し、懐かしい友や恩師と再会し、お互いの近況を語り合い旧交を温める。ことなどを目的として昨年初めて開催され、今回で2回目の開催となりました。

当日は午後2時に懐かしき仙台大学に集合。総会（顔合せ）の後、素晴らしい施設設備を見学、午後4時から船岡駅前のホテルを会場に懇親会を行いました。久しぶりに再会する部活仲間や友人、恩師との話に盛り上がり、自己紹介で出る当時のエピソードに笑いが絶えず、時間たっぷりと旧交を温め合いました。最後に校歌を高らかに歌い、学長のエールで会を締めとお開きとなりました。

その後、近くの居酒屋へ総移動しての二次会も、苦楽を共にした仲間との語らいは尽きることはありませんでした。

来年は第10期同期生（昭和51年4月～昭和55年3月）です。多くの皆様の参加を期待しております。

【報告：仙台大学同窓会 事務局長 大河原則夫】

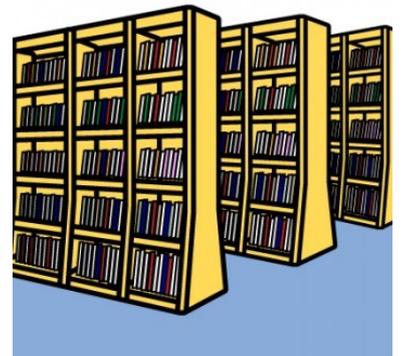


思い出話などで大いに盛り上がりました

英文文献検索講習会を開催

図書館企画運営委員会では、12月6日（火）に英文文献データベース（SPORTDiscus、MEDLINE）の検索方法について講習会を開催しました。講習は、データベース提供の（株）EBSCO様にご担当いただき、コンピュータ実習室において2回（各1時間）実施しました。教員、大学院生約10名が参加し、当日実施したアンケートに、「大変、参考になった」「日常の検索にも有用なノウハウを聞いた」などの感想が寄せられました。また、リモートアクセスや今後の講習会開催へのご期待もあり、委員会でこれらを検討してまいります。新しい情報は、図書館ホームページ等でお知らせします。

【報告：教授・図書館長 小松正子】



仙台大学がスーパースポーツゼビオと連携 『スポーツバイキングinゼビオあすと長町』を開催



子どもたちにニュースポーツを指導する学生

12月3日（土）午前11時から17時までの約6時間にわたり、本学体育学科スポーツマネジメント・コースの学生23名が主体となって企画・運営したイベント『スポーツバイキング inゼビオあすと長町』が、今年3月スーパースポーツゼビオあすと長町店内に新設された多目的スポーツ体験スペース「ゼビオスポーツパーク」にて開催されました。

この催しは、宮城県が全国的に見て肥満傾向児が多く、また、地域スポーツも多くの課題を抱えているという深刻な状況を踏まえ、東北唯一の体育大学である本学とスーパースポーツゼビオあすと長町店がタイアップする事業の一環として実施されました。今回は「スポーツを通じた親子交流」をテーマとし、学生が考案した体験型のニュースポーツを主としたスポーツイベントとなりました。

イベントを開催するにあたり、「仙台大学の専門教養演習」を「スポーツマネジメント・コース所属」として履修する3・4年生の学生たちは、事前の現場視察や店舗スタッフに対するイベント企

画のプレゼンテーション、参加者募集のための広告作成やラジオ出演、太白区内の児童館を中心としたイベント宣伝といった活動に取り組みました。コースとしてもスーパースポーツゼビオあすと長町店としても共に初の試みとなる、「ゼロからの企画・運営」を経験しました。

当日は、A/B/C/Dと4つのグループに分かれてプログラムを実施しました。十分な告知ができたのか不安を抱えながら、客足もまばらな午前中からAグループの企画「フリスビー親子」にてイベントがスタートしました。イベント開始直後は、本当に参加してくれる親子はいるのか、果たして子どもたちの興味関心を引くことは出来るのか、学生たちは緊張の面持ちでした。しかし、次第に親子連れの参加が見られ、現場は思わず笑みのこぼれる雰囲気になりました。学生たちは店内で買い物中の親子連れに、スポーツパークに立ち寄ってもらうよう積極的に声をかけ、午前中と夕方は、一時的に客足が停滞することもありましたが、1日を通して多くの方に楽しんでいただくことができました。

どのグループのプログラムにおいても、申込みは不要で参加でき、主に小学生親子が対象とされていましたが、実際には中学生やご年配の方など、年齢を問わず多くの方がスポーツパークに立ち寄り、ゲームを楽しんでいる一幕もありました。学生たちも充実した表情で、それぞれのグループのプログラムを進行していく中で手ごたえを得た様子でした。このような機会をいただき、プレゼンテーション時や児童館への告知においてご指導いただいたスーパーゼビオあすと長町店のご担当者や関係者の方々に感謝いたします。

【報告：体育学科スポーツマネジメントコース4年 赤坂有紀】



店内にいるお客様にもイベントの周知



スポーツバイキングを実施した学生達

ベラルーシ、ウクライナを訪問して



プリピャチの過去と現在

私は11月20日から28日にかけて、埼玉大学、新潟県立大学、フェリス女子大学、首都大学東京の教員と4名の大学院生・学部生とともにベラルーシとウクライナ両国を訪問する機会を得ました。2016年はチェルノブイリ原発事故後30年にあたり、30年間の「復興」の取り組みに学校や文化施設が果たしてきた役割についての基礎的な調査を目的とした訪問でした。なお、今回の調査は学内の「研究計画に基づく研究費」の助成を受けています。

「濃密な1週間だった」というのが率直な感想です。7日間で2カ国・3都市をまわり、多くの施設を訪問し、多くの関係者からのヒアリングを「強行」したのだから、濃密とはいえ、それぞれの30年間の「戦い」のほんの一部に私たちは触れたに過ぎません。詰め込みすぎたせいか、予定通りに進まなかった部分もありました。

調査の詳細は別稿に譲るとして、ここでは私が感じたウクライナとベラルーシの違い、なかでもチェルノブイリ原発事故に対するポリシーの違いについて簡単に述べるに留めたいと思います。客観的でも分析的でもない、主観に基づく感想文としてご覧いただけると幸いです。

チェルノブイリ原発そのものは現在のウクライナに位置しています。そのウクライナはツーリズム——ダークツーリズムの道を追求しているように感じられました。もちろん誰でも自由に近づけるわけではありませんが、チェルノブイリ原発10km圏内でも立ち入りに必要なのはパスポートとお金と事前申請です。現在も10km圏内では5,000人が働いており、30km圏内まで抜けると12,000人が働いています。30km圏内には働く人向けの売店やカフェがあり、観光客も自由に利用することができます。さらにそこでは観光客向けにチェルノブイリグッズ（Tシャツ、ボールペン、マグカップなど）も販売しています。新たな「石棺」の移設作業のため、私たちは事故を起こした4号炉に近づく

ことはできませんでしたが、「ほんの数週間前までは誰でも100m程の距離まで近づくことができ、記念写真を取ることができた。」と私たちを案内してくれた若い、事故後生まれの25歳の女性で、5ヶ国語を操るself-employedのガイドさんは言っていました。

それでも私たちは、チェルノブイリ原発から3kmのところの位置するプリピャチの街を訪問することはできました。チェルノブイリ地区そのものは800年以上の歴史を持っていますが、プリピャチは1970年のチェルノブイリ原発建設と同時に建設され、主に原発作業員が暮らす新しい街として整備されました。多くの花が植えられ、マンションが立ち並び、旧ソ連圏内で最も物資が豊かで、離れた街からも人びとが買い物にくる「あこがれの街」であったようです。事故当時は49,500人が居住し、平均年齢は26歳とかなり若く、さらには出生率も極めて高く、毎年1,000人の子どもが生まれていたといえます。そのプリピャチの現状は「夢の跡」と表現するしかないものでした。ソ連で最初のスーパーマーケット、メーデーに合わせてオープン予定だった遊園地、飛び込み用プールも備えた複合体育施設、大きな映画館や劇場、多くの子どもたちが学んでいた学校、その全てが音もなく朽ち果てながら森と化していくただなかにあります。ウェブ上にもプリピャチの写真は数多く掲載されていますが、その場所に身を置くというのは、とても静かで、とても強烈な経験でした。

ウクライナでは良くも悪くもチェルノブイリ原発事故は〈市場化〉されているように感じました。多くの人の目に触れるようにすることは、お金を生み、記憶の風化もとどめるような効果もあるでしょう。しかし、その〈市場化〉はチェルノブイリ地区内に放射性廃棄物の最終処分場を建設する計画 (<http://interfax.com.ua/news/economic/378330.html> [2016/12/27]) を推し進める原動力にもなっているのではないのでしょうか。
(次ページに続く)



プリピャチ第3学校の教室（物理質）



ポーシェ放射線生態保護区内に生息するヨーロッパバイソン

ひるがえってベラルーシはどうでしょう。先述したようにチェルノブイリ原発そのものはウクライナに位置していますが、事故で放出された放射性物質の多くはベラルーシに降り注いだとされています。ベラルーシ南部にあるポーシェ放射線環境保護区（約2,160平方km）は現在でも厳しく立ち入りが制限されており、地区（市）や州だけでなく、非常事態省の許可がなければ立ち入ることはできません。私たちも直前、それこそ前日まで訪問できるかどうか分からない状況でした。ベラルーシ国立大学の古澤晃先生、ホイニキ地区の副執行委員長（副市長）のジャーナ・チェルニャヴスカヤさんのご尽力がなければ、今回の訪問はかなわなかったでしょう。ポーシェ放射線環境保護区にはプルトニウムも存在し、そこに一般の人が立ち入ることで、放射線の影響を受けてしまったり、人の移動により放射性物質が区外に運ばれたりすることを極力防ぐ、というのがベラルーシの基本的なポリシーのようでした。レポーシェ環境保護区内では人の立ち入りを制限することで、ヨーロッパバイソンなどの絶滅危惧種の繁殖、調査が可能になったり、生態系への放射線の影響調査といったさまざまな調査の継続的实施が可能になっていたりしています。

その一方でこのポリシーは、その意図があるかどうかはもちろんわかりませんが、ベラルーシの人びとから事故の悲惨さ、とりわけ目に見えるそれを遠ざけてしまっているようにも思えました。ポーシェ環境保護区内には事故以前には92の居住区（市町村）がありましたが、当然ながら現在は誰も居住していません。1986年に11の居住区が「埋葬」処理されましたが、まだ保護区内には当時の建築物が残されています。私たちのベラ

ルーシ国内移動をずっと担当してくれたバスの運転手さんは、今回はじめて保護区内に立ち入ったのですが、感想を「酷い。保護区の中の状況について、多くの国民は知らないと思う」と語ってくれました。そんなベラルーシではありますが、大祖国戦争（第2次世界大戦）に関する戦跡は数多く残されており、こちらはダークツーリズムが根付いています。ベラルーシでは新婚旅行の一環として戦跡をまわる人も多いそうです。



ブリピャチの観覧車

ウクライナ、ベラルーシ両国はチェルノブイリ原発事故に対して、それぞれポリシーを持っています。両国の違いは博物館の運営、サマシオール（Самосёлы：「勝手に動き回る人」＝自主的に強制移住区域に戻って住み着いた人々を指す）、ヤリクビダートル（Ликвидатор：「清掃人」＝事故処理作業に従事した人を指す）の人びとに対する社会保障制度、政府や公的機関への批判的態度などさまざまな側面で見ることができます。そうした違いを踏まえつつ、私たちは両国の取り組みに学び、自国の「問題」と向き合っていかななくてはならないと考えます。

【報告：講師 三谷高史】

平成28年度第3回就職ガイダンスを開催



卒業生の体験談に耳を傾ける学生

12月20日（火）、本学を会場に全学科3年生を対象とした就職ガイダンスが開催され、約250名の学生が参加しました。

ガイダンスではまず、来春からの就職が内定している野地大樹さん（体育学科4年 - 福島成蹊高校卒）、升川礼衣奈さん（体育学科4年 - 山形西高校出身）、三宅怜さん（体育学科4年 - 黒沢尻工業高校出身）の3名が、それぞれ就職活動を通じて感じたことや体験談などを話しました。

また、毎年この時期に行っているガイダンスには、本学の卒業生もお招きしており、今年は、渡部知里さん（新澤酒造、2016年体育学科卒）、佐藤涼さん（ボディワークホールディング

ス、2014年体育学科卒）、山崎優さん（こども体育研究所、2006年体育学科卒）、佐々木康平さん（グラン・スポール、2009年体育学科卒）の4名の方々が後輩のために駆け付け、学生が企業選びを進める中で大変参考になるお話をしていただけました。

ガイダンスに参加した学生たちは、「自分で調べるだけでは限界があるので、先輩たちの話を聞いてよかった。」「先輩方から聞いた話のおかげで、就職の選びかたや優先すべきことが再確認できた。」「講話を聴いて就職に対する意欲が増した。」などと感想を述べていました。

本学では今後、首都圏就職1日弾丸ツアーや合同業界起業セミナーの開催などを企画しており、学生の就職活動に対しても積極的なサポートを行っています。

亡き友を偲び 追悼誌「誠愛」を発刊

今から32年前の1984年（昭和59年）、本学在学中に急性骨髄性白血病のために21歳の若さで亡くなった松影誠二さん（第16期生）の33回忌を偲んだ追悼集「誠愛」がこのほど発刊されました。

今回、追悼誌の発刊の発起人の一人である三村英人さん（第16期生）に当時のことや追悼集の作成に至った経緯などのお話を伺う機会がありました。

三村さんと松影さんは当時、当時の学籍番号が近かったことが縁で、松影さんの闘病中はもちろん、お亡くなりになってから33年経った今もご両親らとの「お付き合い」が続いているのだそうです。

これまで、折を見て同級生などとともに、松影さんの出身地である愛媛県宇和島市を訪れてはお墓参りやご両親にお会いになるなどされてきたのですが、今回、33回忌の節目ということで追悼集の作成を決断。同級生らが賛同して作成がスタートしました。

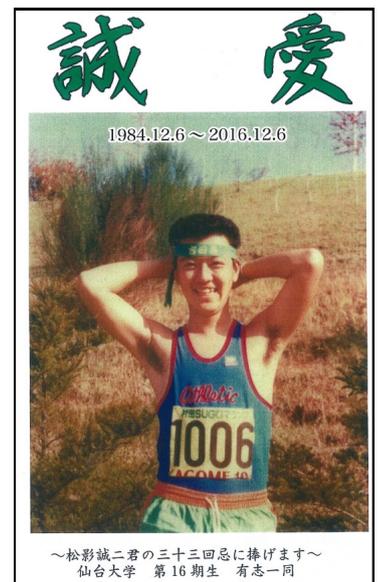
製作の途中には、「投げ出しそうなこともあった」という三村さんですが、何とか完成にこぎつけ、このほどの発刊に至りました。

発刊された追悼誌は12月2日の松影さんの33回忌のご法要に合せ、同級生など10名が宇和島に結集し、ご両親に手渡されました。宇和島にお住いの松影さんのご両親とは、今でも親子同然にお付き合いされているのだそうで、追悼誌を手にしたご両親は「こんなにも素晴らしい追悼集を作ってくれたのですね。」と一言だけ言うと目頭を熱くされ、大変お喜びになっていたそうです。

33回忌法要後にはご両親やご兄弟などと一緒に、時間を忘れて松影さんの尽きない思い出話をしながら亡き友を偲ばれたそうです。

三村さんは岩沼市出身で、仙台大学卒業後には会社経営に長く携わるも、東日本大震災を機に大崎市にあるNPO法人に勤務されています。慰霊碑の横にある記念樹「コウヤマキ」は松影さんのご家族からの寄贈によるもので、11月28日付の河北新報のほっとタイム「コウヤマキに集う 亡き友の志忘れない」で取り上げられました。

追悼誌は広報室にもございます。ご覧になりたい方は是非お声掛けください。



宇和島に結集した皆さん（右から3人目が三村さん）

「仙台大学第3回学術講演会」を開催



約160名の方々にお集まりいただきました

12月15日（木）仙台アエル21階会議室（TKPガーデンシティ仙台）において、「仙台大学第3回学術講演会」（主催：仙台大学、主管：仙台大学学術会運営委員会）が開催されました。「部活動を考える」を本講演会のテーマとし、「教育」の「負の側面」に対して警報を鳴らすと話題の教育社会学者・内田良先生（名古屋大学大学院准教授）を講師としてお招きしました。

前半は、講師の内田先生より「グレーゾーン『部活動』を見える化する～先生と子どもの安全・安心を求めて～」といったテーマで、約1時間ご講演をいただきました。内田先生

は、学校にひそむリスク（スポーツ事故、組体操事故、転落事故、「体罰」、自殺、2分の1成人式、教員の部活動負担など）の様々な事例やデータを収集・分析することで、隠れている実態を明らかにすることを研究テーマとされています。本講演会では特に「部活動」についてご講演いただきました。学校の「部活動」とはいわゆる「グレーゾーン」であり、法律の通用しない部分が多く見受けられるが、曖昧なグレーゾーンを明らかにする（＝「見える化」する）ことが重要であると述べられました。「部活動」は生徒の自主的、自発的な参加により行われる活動（教育課程外）であるにも関わらず、加入を義務付けている学校があることや顧問教員の負担が大きすぎる実態について、データに基づいたご説明がありました。また、十分なリスクマネジメントをしないまま引き起こされる事故の問題もあり、そうした部活動の現状を踏まえ、肥大化した部活動の縮小（＝「ゆとり部活動」）を提言されました。

後半には討論会として、本学の小濱明教授と宮西智久教授がコーディネーターを務め、フロアからの質問に対してそれぞれの立場から意見を述べ合い、議論を交わしました。

会場にいらっしゃった県内の中学校教員の方は、「現場に携わる者として、大変興味深いお話を聞くことができました。私も日々部活動に時間を費やしている教員の一人ですが、内田先生のおっしゃる通り、部活動は生徒の成長を1番リアルに感じ取ることができる瞬間です。私自身もやりがいを強く感じますし、中毒性があるという表現そのものだと思います。ですが、そうではない先生方もまわりには多数いらっしゃいますので、そうした現場の声に焦点を当てられた先生のお話に感動しました。」とおっしゃっていました。

参加者は、本学学生、教職員をはじめ、県内の教育関係者など約160名となり、大変充実した講演会となりました。

ご参加いただいた教職員の皆さま、誠にありがとうございました。

【報告：仙台大学学術会運営委員会】



講師の内田先生（中央）とともに

全日本スケルトン選手権でアベック優勝



小室希選手（左）と宮嶋選手

12月25日（日）に長野県長野市にあるボブスレー・リュージュパークで開催された「2016/2017全日本スケルトン選手権大会」で宮嶋克幸選手（体育学科3年 - 札幌丘珠高校出身）が初優勝、小室希選手（客員研究員 - 平成20年体育学科卒、平成22年度大学院修了）が8連覇9回目の優勝を果たしました。

宮嶋選手は「ソチオリンピックの代表選手に勝ち優勝できたことはうれしい。2018年の平昌五輪出場にもつながる1月からのワールドカップに恐れずチャレンジしたい。」とコメント。小室選手も「アキレス腱断裂という大きなアクシデントを乗り越えての優勝はうれしい。怪

我をしても自分を追い込む必要があることを実感した。ワールドカップでも実力をしっかり出したい。」と話しました。

2人は1月からドイツなどヨーロッパ各地を転戦して行われるワールドカップへの参加が決まっており、平昌冬季五輪の出場も見据えながら、益々の活躍が期待されています。

女子サッカー部 須永愛海選手がINAC神戸レオネッサに加入内定

12月2日（日）に本学LC棟において、女子サッカー部所属の須永愛海（すなが・まなみ - 体育学科4年）がなでしこリーグ1部のINAC神戸レオネッサに加入が内定したことの記者会見が行われました。

須永愛海選手は会見で、「INAC神戸レオネッサという伝統ある強豪チームに入団することが決まり大変嬉しく、光栄に思っています。家族や監督、チームの仲間をはじめ、たくさんの方々に支えられて今日の日を迎えることができました。ありがたいの思いを忘れず日々成長し、チームに貢献できる選手になりたいです。」と語りました。

また、仙台大学で学んだことについて須永選手は「JFAアカデミー福島を離れば練習時間が減り、選手としてはマイナスになるのではないかと声もありましたが自分はサッカーを競技面だけではなく、学問的に学んでみたかったので仙台大学を選んだことは間違いではなかったと、今、心から感謝しています。JFAアカデミーにいた時は周囲の方がお膳立てをさまざまなお世話をしてくれましたのに対し、仙台大学ではそれらのサポートなしに1人で考え行動しなければならぬ環境になりました。結果的に自立心が芽生え、自分で考えプレイする選手になれたと思います。また、私は体育学科のトレーナーコースを選択したのですが良いコンディションの保ち方、怪我の予防、怪我をした時の正しい処置の仕方など、選手として自分の体をベストな状態に保つ知識を得られアスリートにとって大変重要な4年間でした」と述べました。

阿部芳吉学長は「女子サッカー部が創部され10年目にしてはじめての1部リーグ選手の誕生は大変うれしい。2020年の東京オリンピックの選手としても活躍してくれることを願う共に、ぜひ須永選手に続く選手を輩出したい。」と須永選手及び学生たちの今後の活躍に期待を寄せました。



INAC神戸レオネッサに加入が内定した須永選手（左から2人目）